

## 実施報告書

## ◆ 基礎情報

計画名	周術期の看護実践能力向上に向けた卒業生および在校生双方のリーダーシップの育成
実施責任者	看護学部看護学科 伊吹愛
対象者	看護学部看護学科 2年生 96名 および 卒業生4名
実施期間	2025年11月～2026年1月

## ◆ 取組み概要

急性期医療の現場で働く看護師において、チームメンバーと協働しリーダーシップを発揮することは重要である。「成人看護学援助演習Ⅰ」は2年生後期に開講される演習科目であり、グループメンバーと協力しながら自分なりのリーダーシップを発揮し、周術期にある患者に対する看護技術を学ぶことを目的としているが、複数の技術の一連の実施や複雑な情報を統合してアセスメントする力が求められるため、その修得に苦労する学生が多い現状がある。卒後2～3年目の卒業生は、急性期医療の現場で一連の看護技術を身に着けた時期であるとともに、学生が苦手とする点が理解でき、演習のピアエデュケーターとして適切であると考えた。また後輩への指導を通して、大学で身につけたリーダーシップを改めて確認し、自身の課題を振り返る良い機会になると考えられる。

以上より、成人看護学援助演習Ⅰにおいて、卒業生・在校生の相互作用を通して、双方のリーダーシップの育成を目指すことを目的とした。

## ◆ 取組み全体の流れ

## 成人看護学援助演習Ⅰの概要

- 対象：看護学部2年生 95名
- 全14回の演習において、周術期の事例（肺がん、胸腔鏡補助下肺葉切除術）を用い、看護過程および看護技術の演習を実施する。演習を通して、急性期の健康問題をもつ成人に対して、適切な看護過程を展開するための知識、技術について理解する

回数	日程	時間	内容
1・2	11/17（月）	3・4	看護過程演習
3・4	11/24（月）	3・4	事例選択・情報収集、アセスメント 関連図、看護計画
5・6	12/1（月）	3・4	
7・8	12/8（月）	3・4	看護技術演習
9・10	12/22（月）	3・4	術後経過観察手帳書作成 タスクトレーニング シミュレーターを使用した技術チェック
11・12	1/14（水）	3・4	
13・14	1/19（月）	3・4	看護計画の全体発表会

■卒業生がピアエデュケーターとして参加した回

## 取り組みの評価

## ■ 在校生

- リーダーシップルーブリックを用いて自己評価
  - 4要素：「目標設定と共有」「率先垂範」「相互支援」「包容性」  
S=5点、A=4点、B=3点、C=2点、D=1点
  - 演習前の得点の変化を、全体および各項目別に分析
- 演習を通して高めたい「高められたリーダーシップ」の観点の自由記載
  - 演習前の記載の変化を質的に分析
  - 卒業生の参加がリーダーシップ学修に与えた影響について自由記載

## ■ 卒業生

- グループインタビューを通して以下の内容を質的に分析
  - 演習前にピアエデュケーターとしてどのようにリーダーシップを発揮するか
  - 演習後、ピアエデュケーターとしての学び、リーダーシップに関する意識の変化

## 在校生（2年生）



6名/グループ  
を作成（計16G）

- 個人でリーダーシップルーブリック・高めたい点を記入
- グループメンバーでチームの方針・ルールを作成

- 個人でリーダーシップルーブリック・高められた点を記入
- グループメンバーでチームの振り返りシートを作成

演習開始

演習終了

## 卒業生



4名でチームを作成

- 個人で自身が高めたいと思うリーダーシップを明確にする
- チームでピアエデュケーターとしてどのようにリーダーシップを発揮し在校生に関わるのかを話し合う

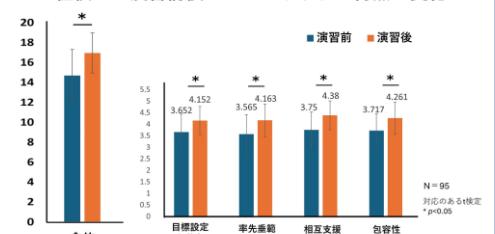
演習参加  
(6回)

- チームでピアエデュケーターとしての学び、リーダーシップに関する意識の変化、自己の課題等を話し合う

## ◆ 取組みの成果

- 在校生のリーダーシップルーブリック得点の全体平均は、演習前後で14.685点から16.957点へと上昇していた。また、各項目においても演習後に平均点が上昇し、特に相互支援・率先垂範で上昇の伸びが大きかった。
- 本取り組みの結果、在校生のリーダーシップは全体的に向上しただけでなく、各項目が均一に育成され、他者を意識した行動をとるとともに、主体的に行動する姿勢を促進した可能性がある。
- 卒業生の演習前後におけるリーダーシップの意識の変化では、率先垂範を中心として「引っ張るリーダーシップ」から、相互支援を基盤として「支援的なリーダーシップ」へ変化がみられた。

## 在校生：演習前後のルーブリックの得点の変化



# 実施報告書

## ◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>在校生は演習開始時に、グループで「チームの方針・ルール」、個人で「リーダーシップ行動確認シート」を記入した。チームの方針はGoogleドライブに提示し、各回の演習開始時にグループ全員で確認できるようにした。</li> <li>卒業生は演習開始前に、4名のチームでピアエデュケーターとして在校生に対しどのようにリーダーシップを発揮するのか話し合うとともに、各自で「リーダーシップ行動確認シート」を記入し、自身が意識して高めたいと思うリーダーシップを明確にした。各回の演習開始前に、教員よりピアエデュケーターとして期待する役割を伝え、サポート体制を整えた。</li> </ul>
協働活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>在校生は6名/グループとなり、周手術期の事例患者（肺がん、胸腔鏡補助下肺葉切除術）をもとに、看護過程演習として術後1日目の看護に必要となる情報収集、アセスメント、関連図、看護計画の作成に取り組んだ。また看護技術演習では、術後1日目の全身状態の観察に必要な手順書を作成したのちに、実習室およびシミュレーションルームで一連の全身観察の実践を行った。</li> <li>卒業生は4名でチームを組み、在校生のグループワークの際に助言・指導を行った。各自の専門性を活かすために、現在の所属や近況を情報共有してから話し合いを始めた。</li> </ul>
共立リーダーシップの観点での振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>在校生は演習終了時に、グループで「チームの振り返りシート」、個人で「リーダーシップ自己評価シート」を記載し、本演習で意識して取り組めたリーダーシップの項目を明確にする。また、卒業生の参加がリーダーシップ学修に与えた影響を振り返った。</li> <li>卒業生は演習終了後、グループインタビューによりピアエデュケーターとしての学び、リーダーシップに関する意識の変化、自己の課題等を明らかにした。</li> </ul>

## ◆ 学生の成長に関する総括

本取り組みの結果、在校生のリーダーシップルーブリックの合計得点は全体的に上昇し、また各項目においても演習後に平均点が向上がみられた。特に「相互支援」、「率先垂範」で上昇の伸びが大きかった。演習前後のリーダーシップに対する意識の変化を分析したところ、「相互支援」に関する記載が最も多く、演習前は課題を自身で抱え込む、あるいは迷惑になると感じて支援を求めることが消極的であったが、演習後は自身の支援ニーズを言語化し、自ら支援を求めることが重要性に気づいた様子が伺えた。また率先垂範においては、自ら行動することで場が動く経験を通じて、リーダーシップを構成する具体的行動への理解が促進されたていた。

卒業生は、在校生を「引っ張っていく」意識から、答えを教えるのではなく考え方を促す支援の重要性を学び、今後の後輩指導に生かせる学びを得ていた。

## ◆ 取組みを通した全体の所感

本取り組み後の振り返りにおいて、在校生は卒業生の参加によるリーダーシップ学修への影響として、「質問がしやすく、一緒に考えてくれる存在であった」ことを挙げていた。学生がつまづきやすいポイントを理解し、同じ立場に立って支援する卒業生の存在は、「ワークをどのように進めていたら良いかわからない」「間違えるのが怖い」といった不安を軽減し、心理的安全性の向上につながったと考えられる。

これまでにも同様の演習を実施してきたが、今年度は特にグループワークが活発であり、最終成果物の完成度も高かった。これらのことから、卒業生の参加は在校生のグループワークにおけるリーダーシップ行動を促進する一助になったと考えられる。また、本取り組みは、同じ立場を経験した卒業生との相互支援を通じたリーダーシップ育成に一定の効果を示したと考える。

## ◆ 今後の展開

本取り組みを通じて、在校生と卒業生の相互作用がリーダーシップ学修の促進に寄与する可能性が示唆された。次年度以降は、この効果をより安定的かつ体系的なものとするため、卒業生の関わる回数や関わり方や役割を明確化したプログラム設計を行う必要がある。